

Pay Forward：同窓生の皆さんに知ってほしいこと

同窓生の皆様

突然のお手紙で失礼します。学校法人国際基督教大学理事長の竹内弘高です。私は、1969年にICUを卒業した13期生です。2019年6月から、同窓生として初めて母校の理事長を拝命しています。

ICUは平和を願う先人たちの祈りと募金によって建てられたことを、皆さんはご存知と思います。ただ、理事長就任以来、「他にも私たち同窓生が十分に知らないことがある」、そう痛感して、皆さんに三つのことをお伝えしたく、お手紙をお送りすることにしました。長文となりますが、是非、最後までお付き合いください。

まず第一に、ICUは献学以来、少人数教育を続け、多額の資金を一人ひとりの学生にかけ続けてきてくれたということです。初めて4学年がそろった1956年の段階で、少人数教育のためにかけた経費の額は、学費収入を超え、一人の学生が卒業するまでの4年間で70万円（詳しくはコラム1を参照してください。現在の貨幣価値に換算すると500万円弱）に達していたのです。教育活動経費が学費収入を大きく上回っていたということです。

この学生一人当たりの4年間累計の不足額（現在の貨幣価値でみて）は、80年代までにはおよそ300万円に達し、学費を段階的に引き上げ、学生数が増えた90年代以降現在までは、およそ200万円となっています。私は1969年卒ですが、見方を換えれば、ICUにとってのこの300万円のマイナスは、私にとっては同じ額の寄付者からの援助だったということになります。

第二に、これだけの赤字を恒常的に計上し続けながら、ICUは約70年にわたり存続してきたということです。その原点は、1945年の終戦後、戦争の反省に立ち、二度と過ちを繰り返すまいと、日米両国で展開された募金活動にまで遡ります。献学以来のICUの特徴ある教育活動に必要な資金は、主にこの寄付金とその運用益によって補填されてきたのです。この運用益も含めた寄付金による教育活動への支援は、献学以来累計で現在の貨幣価値でおよそ1,000億円に上ります（詳しくはコラム2を参照）。皆さんの多くは、私と同様、ICUでの教育を受けるためにご家族等から学費をはじめ、経済的支援を受けてこられたと思います。ですが、それに加えて、この1,000億円が私たちの学生生活を支えていたのです。

第三に、ICUが「お金持ちの子供だけが入れる大学」になるのではないかという危機に直面していることです。現在の学費は年間143万円で、東京にある他大学に比べて高水準です（表1を参照）。

献学時の学費は3万円（今の貨幣価値で15万円）。私が入学した1965年は、授業

料6万円と設備費4万円で年間10万円（今の貨幣価値で38万円）。私の所属していたサッカー部のメンバーには、経済的に恵まれていない家庭の学生もいましたし、先輩には、アフリカやアジアなど世界中の国や地域からの留学生も含まれていたのを覚えています。当時は、決して裕福な家庭の子供しか通えない大学ではなかったと記憶しています。

少人数教育を維持するには、学生数を増やすことはできません。経済的に恵まれない学生にも教育の機会を提供するには、学費を上げることもできない。このジレンマを解決するために、私は献学の理念に立ち返ってみました。「国際基督教大学創史」によると献学当初のICUは、優秀で能力がある学生であれば、学費が払えなくても入学を拒否しないことを対外的に明言し、経済的援助が必要な学生には、十分な奨学金を用意するという方針を掲げていました。当時のICUは、学費収入の25%に相当する金額を奨学金として学生に提供していたのです。恥ずかしながら、私も多くの学生が（サッカー部の先輩を含め）奨学金を受け取っていたとは知りませんでした。

私には夢があります。現実としては、たしかに、143万円という高い学費を設定せざるを得ない。しかし夢は、広く海外も含め経済的に恵まれない学生にも他にこの例のない教育の機会をなるべく多く広く提供することです。世界の平和の構築に資する人材を育成するとともに、ICU献学のパーパス（purpose）を実践することです。具体的には、ICUでの奨学金支給率を25%に復活したいのです。偶然かもしれませんが、25%という数字は、ハーバード大学で経済的に恵まれない家庭の学生がフル・スカラーシップ（学費全額免除）を受けている割合と同じです。高い学費を払うことのできる学生は、その25%の学生と共に学ぶことで、ダイバーシティとは何かを肌で感じ、世のため人のために尽くすことの大切さを学びます。

「お金持ちの子供だけが入れる大学」になってしまうと、大学を創設するときに寄付してくださった日米の寄付者のご期待を裏切ることになります。私たちが学生時代に受け取った寄付者の思いを次世代へ繋ぐトーチリレーとして、未来の同窓生にPay Forward（日本語では「恩送り」と訳しますが、Septemberの私には、英語の方がしっくりきます）することで、夢を実現したい。「奨学金支給率25%復活（仮）」という目標達成のため「Pay Forward基金（仮）」を設立して、未来の同窓生を支援していきたいと思います。今後、大学からみなさんへこのプロジェクトへのご協力をお願いをさせていただきますので、是非よろしくお願ひします。

今回の手紙を卒業生の皆さんに書いたのは、この夢を共有したいと思ったからです。

ご理解と共感（empathy = putting yourself in someone else's shoes）を得られれば幸いです。

理事長

竹内弘高

コラム1：不足額70万円の計算

1956年決算では、総支出額1億300万円に対して学生納付金はわずか2,700万円でした。この収支のアンバランス（会計学ではこれを赤字と呼ぶ）を学生一人当たりで換算すると、卒業までの4年間で70万円に達した計算になります。

コラム2：献学以来の教育活動の赤字を埋めてきた寄付金とその運用益について

献学からしばらくは、不足分のほとんどを米国のJapan ICU Foundationからの寄付で賄っていました。その後、70年代にキャンパスの半分近くの土地を東京都に売却し、300億円を超える売却代金の収入がありました。この土地は、献学時に多くの非キリスト者を含む国内の寄付者からの寄付で購入され、献学当初は食糧確保を目的とした農場、その後はゴルフ場として活用されていましたが、最終的に野川公園の用地として都に売却されました。この土地の売却代金も基金に加えられ、以後増えた運用益も教育活動の赤字補填に使われています。この運用益も含めた寄付金による教育活動の支援は、献学以来の累計で現在の貨幣価値でおよそ1,000億円に上ります。献学時の国内外での寄付が無ければ、ICUの教育の継続は不可能でした。学生時代に皆さんの多くは、ご両親から学費を始め経済的支援を受けてこられたと思います。それらに加えて、ICUにおいては、それ以外に多くの寄付者が皆さん一人ひとりの学生生活を支えてきたのです。

表1：在東京主要大学の授業料比較

(万円)

大学	入学金	授業料	施設費	その他	合計	合計(入学金を除く)
国際基督教大学	30.0	107.7	35.4		173.1	143.1
青山学院大学	20.0	83.3	20.9	16.1	140.3	120.3
慶応義塾大学	20.0	88.0	20.0	6.8	134.8	114.8
立教大学	20.0	112.1		0.6	132.7	112.7
明治大学	20.0	88.1		23.3	131.4	111.4
上智大学	20.0	78.0		29.3	127.3	107.3
中央大学	24.0	82.3	21.9	3.0	131.2	107.2
法政大学	24.0	83.1		22.8	129.9	105.9
学習院大学	20.0	68.6	28.0	7.2	123.8	103.8
専修大学	20.0	75.0	23.0	4.4	122.4	102.4
早稲田大学	20.0	99.9		2.0	121.9	101.9
日本大学	26.0	81.0	17.0		124.0	98.0
一橋大学	28.2	64.3			92.5	64.3
東京大学	28.2	53.6			81.8	53.6

注) 各大学のHPから。経済系学部。21年度または22年度。